

止摂開口精母系の漢語音を表わす契丹小字について

吉池孝一

一

契丹の固有語の音節初頭音には、摩擦音の s はあつたけれども ts-,tsh-などの破擦音は無かったと一般に想定されている。同様の音特徴は、契丹語と同系と考えられるモンゴル語やツングース語に広くみられるところであり、おそらくこの想定は正しいであろう。そしてその契丹語音を表記する契丹小字に目を移せば、契丹語音 s は契丹小字「𐰺」で表記される。そうすると、契丹小字で書かれた契丹語碑文中の借用漢語音の ts-,tsh-,s-は、小字でどの様に表記されるのであろうか。最初期、漢語音 ts-,tsh-,s-は契丹小字の「𐰺」一字で表記された。契丹語音に舌尖破擦音 ts-,tsh-などが無かったとするならば、これもまた一つの処置であろう。その後、漢語音の分析の進展にともない契丹小字の正書法に改善がみられた。まず問題の音は s-,tsh-と ts-の二つに分けられた。s-,tsh-を従来の「𐰺」で表記し、ts-の方は「𐰺」に二点を付加し漢語専用の文字として「𐰺」を作りこれで表記した。その後、s-と tsh-も細分された。s-を従来の「𐰺」で表記し、tsh-のためには新たな文字「𐰺」を作った。最終的に三種の漢語音は「𐰺」s-、「𐰺」ts-、「𐰺」tsh-のように書き分けられることとなった。以上は『KOTONOHA』13号で述べたところである(注1)。13号では音節初頭子音 ts-,tsh-,s-のみに注目し、この音節初頭子音と契丹小字との関係を検討した。本14号では、tsī,tshī,sī(iは中舌的高母音)という漢語の音節全体を契丹小字でどの様に表記したかということにつき検討する。なお tsī,tshī,sīは、伝統的な漢語音韻学の用語でいう止摂開口の韻母、精母系の声母を持つ漢語音に相当する。これを止摂開口精母系の漢語音と呼ぶことにする。なお、以下の十三種の碑文を用いて調査を進める。

- ① 1053年「耶律宗教墓誌」(劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民1995,「契丹小字解讀五探」『漢学研究』13-2,pp.313-347.)
- ② 1055年「興宗皇帝哀冊[手写本のみ存する]」(清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ③ 1057年「蕭令公墓誌」(清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ④ 1076年「仁懿皇后哀冊[手写本のみ存する]」(清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)
- ⑤ 1092年「耶律迪烈墓誌」(廬迎紅・周峰2000,「契丹小字《耶律迪烈墓志銘》考釈」『民族語文』2000-1.)
- ⑥ 1101年「道宗皇帝哀冊」(清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.)

- ⑦ 1101 年「宣懿皇后哀册」（清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。）
- ⑧ 1105 年「許王墓誌」（清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。）
- ⑨ 1107 年「澤州刺史墓誌」（王未想 1999,「契丹小字《澤州刺史墓誌》殘石考釋」『民族語文』1999-2,pp.78-81.）
- ⑩ 1115 年「故耶律氏銘石」（清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。）
- ⑪ 1134 年「経略郎君行記」（清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。）
- ⑫ 1150 年「蕭仲恭墓誌」（清格爾泰 1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。）
- ⑬ 1170 年「博州防禦使墓誌」（劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民 1995,「契丹小字解讀五探」『漢学研究』13-2,pp.313-347.）

二

上記十三種の碑文によると止摂開口精母系の漢語音は契丹小字で以下のように記される。

- ② 1055 年「興宗皇帝哀册」。「𐰇」で記したもの、沈州刺史の刺 1 例。
- ③ 1057 年「蕭令公墓誌」。「𐰇」で記したもの、儀同三司の司 1 例、太子少師の子 1 例、刺史の刺 1 例。
- ⑤ 1092 年「耶律迪烈墓誌」。「𐰇」で記したもの、牌司の司 4 例、錢帛二司の司 1 例、司 1 例、丞司の司 2 例。
- ⑥ 1101 年「道宗皇帝哀册」。「𐰇」で記したもの、国子祭酒の子 1 例。
- ⑦ 1101 年「宣懿皇后哀册」。「𐰇」で記したもの、国子祭酒の子 1 例。
- ⑧ 1105 年「許王墓誌」。「𐰇」で記したもの、儀同三司の司 1 例、刺史の刺 2 例。
「𐰇」で記したもの、太子賓客の子 1 例。
- ⑨ 1107 年「澤州刺史墓誌」。「𐰇」で記したもの、刺使の刺 1 例。「𐰇」で記したもの、金紫崇祿の紫 1 例。
- ⑩ 1115 年「故耶律氏銘石」。「𐰇」で記したもの、金紫崇祿大夫の紫 1 例。
- ⑫ 1150 年「蕭仲恭墓誌」。「𐰇」で記したもの、儀同三司の司 3 例、守司空の司 1 例。
「𐰇」で記したもの、太子少師の子 2 例。
- ⑬ 1170 年「博州防禦使墓誌」。「𐰇」で記したもの、「…字二賜又…」の字 1 例。
「𐰇」で記したもの、刺史の刺 1 例。

以上をまとめると、

「𐰇」：司（心母 sī）14 例、刺（清母 tshī）4 例、子（精母 tsī）1 例。

「𐰇」：刺（清母 tshī）1 例。

「𐰇」：刺（清母 tshī）1 例。

「𐰇」：子（精母 tsī）5 例、紫（精母 tsī）2 例、字（従母おそらく tsī）1 例。

となる。先に述べたように、ts-, tsh-という初頭子音が契丹語の固有語になかったとすると、tsī, tshīという音節も契丹の固有語には無かったということになる。問題は契丹語にsīという音が有ったかどうかということである。初頭子音のs-は契丹語音に認められる。したがって母音のiが問題となる。「傘谷」「禿谷」「傘谷」は「谷」(注2)を後置して二つの要素で止摂開口精母系の漢語音を表記した例である。「傘」「禿」「傘」は音節初頭の子音を、「谷」は後続の母音を表わしている。「谷」の音価として、これまでことわりなく中舌的高母音のiを当ててきたけれども、それは以下の諸点による。すなわち、止摂開口精母系の漢語音は、『蒙古字韻』(1308年序)ではパスパ文字でhiと記され、iとは区別される。またこれらの字は、漢語近世音の韻書『古今韻会舉要』(1297年序)で「賞字母韻」として独立したグループにまとめられ前舌高母音のグループとは区別される。さらに、契丹小字資料とほぼ同時代の資料と目される邵雍(1011-1077)の著になる「皇極經世声音唱和図」でも、止摂開口精母系の字は「開」という音の枠組みに置かれ、前舌高母音のiとは異なる音となっていたことがわかる。契丹小字自身はどうかというと、前舌高母音のiに対応する小字には「𠬞」があり、「傘𠬞」西、「傘𠬞」「禿𠬞」漆、「傘𠬞」祭、「𠬞𠬞」懿などの韻母の表記に常用され、「谷」とは区別される。以上により、「谷」を、中舌的高母音のiに対応する文字と見て大過はない。

この母音を表わす「谷」は止摂精母系の漢語音以外においても使用される。その用例を碑文①より⑬の中から全て拾いあげると30例となる。その内、24例が漢語、1例が契丹語、5例が未解読とされている。もしも「谷」を契丹の固有語に対応する母音とすると用例数が少なすぎる。仮に未解読の5例全てが契丹語であるとして、すでに契丹語とされている1例と併せてもその総数は6例にしかない。固有語の母音としては出現頻度が低すぎる。私は、「谷」は漢語専用の文字であり、契丹語にも使用例が有るとするのは何かの誤りではないかと考えている。劉鳳翥(1983;pp.259-261)(注3)は、資料⑩の「𠬞谷」jīを、『華夷訳語』のモンゴル語「者耶(外甥)」および『高昌館訳語』のウイグル語「尺呀(外甥)」と比較し、「者」や「尺」と音が近いと判断。「𠬞谷」jīを「外甥」の意味に対応する語であるとするけれども、十分に納得のゆく説明とは言い難い。用例数よりみて、「谷」を漢語専用の契丹小字とし、未解読の5例および契丹語とされている1例を漢語等の外来語と想定して解読を進めるべきと考える。

次に「𠬞」の状況をみる。「𠬞」は合計23例に使用される。その内、漢語は19例、それ以外の4例は未解読となっている。今のところ、契丹語の表記に当該の字が使用されたとする例は報告されていない。あるいは未解読の4例のなかに契丹語があるかもしれないが、用例数の状況より「𠬞」を漢語の専用字とみて大過はないであろう。

三

止摂開口精母系の漢語音は、契丹小字一字を使用して「𠬞」と記される場合と、二字

を使用して「傘谷」「𠂔谷」「傘谷」のように記される場合がある。最後に、このような重複表記の状況はどのようであり、またなぜ重複表記が起こるのかということ述べる。碑文の②③⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑫⑬によると、「𠂔」はほぼ全期を通じて使用されているけれども、中舌の高母音*i*を推定した「谷」は⑥以降にみえる。分布の状況より判断し契丹小字碑文群を、「𠂔」を使用する前半期と、「𠂔」と「傘谷」「𠂔谷」「傘谷」を併用する後半期に分けることができる。このような前期と後期の別が生じた過程を以下のように解釈する。

漢語音節の *sī,tsī,tshī* は契丹語音に無かった。そこで、当初は、*sī,tsī,tshī* を子音と母音に分析することなく漢語専用の文字として「𠂔」を作り、この一字で *sī,tsī,tshī* という三つの音を表記した。その後、漢語音の分析の進展にともない契丹小字の正書法に改善がみられた。子音のみについて言えば、「傘」*s*-より「傘」*ts*-が作られ、更に「𠂔」*tsh*-が作られた。これと平行して、契丹の固有語音には無かった中舌の高母音*i*が析出されるようになり、この母音のために新たに専用の文字「谷」が作られた。そして「傘」「傘」「𠂔」と「谷」を組み合わせて *sī,tsī,tshī* を表記するとともに従来の「𠂔」も併用した。碑文⑫⑬に拠るかぎり、最終的に確立した表記の規範が、「𠂔」*sī*「傘谷」*tsī*「𠂔谷」*tshī*であったか、それとも「傘谷」*sī*「傘谷」*tsī*「𠂔谷」*tshī*であったか分からない。「傘谷」*sī*、「傘谷」*tsī*、「𠂔谷」*tshī*という書き分けを伴った上での「傘谷」*sī*の例は今のところ実証されていない。しかしながら、今後、碑文⑫⑬と同期の碑文が新たに発見されたならば、「傘谷」*tsī*、「𠂔谷」*tshī*という表記とともに、「傘谷」*sī*という表記の例が実証されるのではなかろうかと期待している。

注

- 1) 吉池孝一 2003 「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』13号。
- 2) 「谷」には異体字として「𠂔」があるけれども、「谷」で代表し提示する。
- 3) 劉鳳翥 1983 「契丹小字解読再探」『考古学報』1983-2;pp.255-270。